

とっとり発エネルギーシフトへの挑戦

1 震災の教訓とエネルギー問題

東日本大震災で被災された皆様に対し、心からお悔やみとお見舞いを申し上げます。

多くの人命と生活の場の喪失をもたらした未曾有の大震災は、この地球という惑星に暮す限り、時に襲い掛かる自然とともに生きていかなければならないこと、さらに福島第一原子力発電所事故を通して、原発のみに依存する現状を脱皮し再生可能なエネルギーによるライフスタイルを希求していかなければならないことを、多大な犠牲を払いながらわが国と世界に投げかけるものとなりました。今こそ大胆なエネルギーシフトへアクセルを踏むべき時であり、再生可能エネルギーの賦存量に富む鳥取県として、未来への責任を果たさなければならぬと、果敢に挑戦していく所存であります。

2 鳥取県版グリーンニューディールと再生可能エネルギーの促進

これまで鳥取県においても、グリーンニューディールの一環として、急速に再生可能エネルギーへと舵を切ってきました。

風力発電については、県直営の発電事業も含め、県内各地で立地が進展するようになるとともに、住宅用太陽光発電については、全国トップレベルの県独自補助制度を設け、この効果により太陽光発電設置住宅が急増しました。その結果、大型風力発電を加えた世帯あたり発電量は全国3位にまで上昇することとなりました。水力発電についても、農業用をはじめとした水路やダムを活用した小水力発電、マイクロ水力発電の研究や実証実験などを展開するなど、推進を図ってきました。

他方、本県には火力発電所や原子力発電所が立地していないことから、電力自給率は約4分の1程度と低い状況にあります。わが国のエネルギーミックスを見直す方向性は、鳥取県でも震災後のエネルギー生産に貢献するチャレンジを促すものとなりました。

3 鳥取県から新たなエネルギーシフト実現へ

わが国全体のエネルギーシフトを断行する中で、鳥取県にはどのように貢献する可能性があるか考えれば、実は再生可能エネルギーの有望性も見えてきます。

例えば、鳥取砂丘の砂丘列は北西の季節風と垂直に形成されているのですが、これは風の力が元々強い地域であるという証明にほかなりません。中国山地から程近い日本海に向かって下り降りてゆく豊富な水は、小水力発電やマイクロ水力発電の適地が無数にあることを意味するものです。また、鳥取県から岡山県にかけての一带は地熱エネルギーの賦存量が高いという調査結果もあり、昨年度本県が実施した調査でも、バイオマスや温泉熱なども導入の可能性が高いことが判明しました。山陰は晴れの日が少ないため太陽光発電に適していないという固定観念がありますが、実は鳥取県西部などは東京と変わらない日射量であり、立地可能性は十分にあるということも分かってきました。

このように再生可能エネルギーの賦存量が豊富に認められる鳥取県として、エネルギー生産に向けての責任を果たしていかなければなりません。

今日脚光を浴びているメガソーラー発電についても、本県は誘致にいち早く名乗りをあげていま

す。また、そのほかにも太陽光発電適地の洗い出しを始めており、大規模事業場の屋根の利用も含めて、現実の発電の可能性について検討に乗り出すことにしました。

今回の福島第一原子力発電所の事故により、広範囲に渡って甚大な被害が発生したことから、原子力発電などを枢軸とする大規模集中型のエネルギー供給構造から、各地の自然エネルギーを活用する分散型のエネルギー供給構造への転換を加速的に進めなければなりません。そのために、鳥取県発の取組みとして、災害時等でも小水力発電や太陽光発電などにより自立したエネルギー供給が可能なマイクログリッドの構築について、特区制度の申請を検討するなど、時代の突破口を開いていきたいと考えています。

世界的な経済の停滞感が急速に強まる中、イノベーションを起こしていく・・・そのためにも再生可能エネルギーは時代の扉を開ける鍵となります。

とっとり発エネルギーシフトへの挑戦で、人口最小県の鳥取県から、自然が豊富にあり小さいからこそ機動力を発揮しえる環境にあることを活かし、震災後の日本を再生する役割を果たせればと念じています。